

新たな北杜市総合計画の策定に関する 企業・団体からの提言

目次

(1) 市(行政)が力を入れるべき取り組みや必要な支援に対する意見.....	3
① 子育て・教育・若者.....	3
② 健康・福祉.....	8
③ 市民生活・文化.....	8
④ 産業経済・観光.....	9
⑤ 環境・都市基盤.....	9
(2) 5つの「2030年、地域のありたい姿」の実現に向けたご意見等.....	11
「子どもの笑顔が自分の笑顔になるまち」に向けて.....	11
「ともに、よりよく生きるまち」に向けて.....	12
「もっと、世界を魅了するまち」に向けて.....	13
「新たな価値を奏でる創造のまち」に向けて.....	14
「安心をずっと、サステナブルなまち」に向けて.....	14
(3) その他、ご意見やご提案等.....	16

1. 調査実施概要

(1) 目的：

北杜市及び市内企業・団体が所属する業界・分野の進展のために、北杜市（行政）が力を入れるべき取組や、北杜市（行政）と業界・団体等が連携して実施できる取組を収集し、新たな北杜市総合計画の事業立案に活用するために実施した。

(2) 実施方法

行政と連携した公益的な活動が可能と考えられる市内の様々な分野の企業・団体（22 団体）に、郵送やメールにて依頼状を送付し、回答専用 Web ページへの記入を依頼した。

(3) 実施期間：令和3年10月28日～11月5日

(4) 回答企業・団体数：12 件

スポーツ分野	1	子育て分野	3	福祉分野	2
医療・健康分野	2	環境分野	1	観光分野	1
産業・経済分野	1	教育分野	1		

(5) 質問内容

- ① 業界等の課題改善や新たな社会潮流を踏まえた事業展開において、北杜市（行政）が力を入れるべき取組みや必要な支援

※公益的な取組みへの支援となるため、所属する業界・分野の視点での記入を依頼

- ② 新たな北杜市総合計画で掲げる5つの「2030年、地域のありたい姿」の実現に向け、北杜市（行政）と業界等との連携のアイデアや必要な取組

※「2030年、地域のありたい姿」は、回答用専用Webページで示すとともにPDFも添付した。

(6) その他

本書は、回答者の意見を原文に近い内容のまま掲載しているが、回答のあった社名・団体名、及び話題の中で挙げられた特定の企業・団体名は明示しない形で、取りまとめている。

2. 意見・提言の要旨

(1) 市(行政)が力を入れるべき取り組みや必要な支援に対する意見

業界等の課題改善や新たな社会潮流を踏まえた事業展開において、北杜市（行政）が力を入れるべき取組や必要な支援の提言について、「子育て・教育・若者」「健康・福祉」「市民生活・文化」「産業経済・観光」「環境・都市基盤」の5分野にわけて示す。

① 子育て・教育・若者

< 相談支援 >

■気軽にいける相談できるカウンセリングルームの設置

- ・ 悩みは十人十色、カウンセラーを何人が雇って、駆け込み寺みたいな誰でもいきやすいところがあるといいと思います。占いの館みたいに、色んなタイプの先生がいた方が北杜市は合いそうです。子どもの事を思うなら、親育てが最重要だと思います。

■相談や交流場などを企画する子育てサークルへの補助金制度

- ・ 児童カウンセラーを招き、子育てに関する座談会を実施しています。市民自主企画講座は手間に見合う額の補助がなく、子育てサークルへの補助金をお願いします。
- ・ 市の子育て支援施設に親切な支援員や専門のカウンセラーがいると思いますが、深刻に相談するほどでもないとか、相談しても何にもならないとあきらめている人がいると思います。生まれた子供をかわいと思えない、赤ちゃんが泣き止まない、言葉の発達が遅い、お友達をたたいてしまう、不登校、兄弟げんか、宿題が多すぎるなどなど、さまざまな相談があります。
- ・ 市の施設では、相談すると虐待の疑いがあるとか、精神障害とか思われるかもしれないという不安があるのかもしれない。公的でない相談の場が必要な人もいます。

< 経済的負担の軽減 >

■妊婦健診などの出産までと出産にかかる費用への補助

- ・ 妊婦健診などの出産までと出産にかかる費用が高額補助はありますが、それでまかなえない分がかなりありました。

■幼稚園等の経済的負担の軽減

- ・ 児童手当の増額や私立幼稚園など含めた子育て関連費用の無償化を求めたい。

■北杜市ならではの特性を生かした幼少期の保育・教育の環境づくり

- ・ 子育てする上で大切なことのひとつが、子どもを育てる母親や家族の心の状態です。その母親や家族の心の状態をサポートするのは周囲の人や環境です。周囲の人や環境は、このまち”北杜”から生まれます。私たちは子育て支援＝まちづくりだと考えて活動をおこなっています。
- ・ 現在北杜市では、経済的負担の軽減の支援策や相談窓口の充実など子育て世代にはとてもありがたい支援をおこなってくれています。こういった支援はどんな方にも行き届き、支援ベースの底上げになっていると思います。しかしその反面、時代の変化とともに子育て環境も変化し、行政支援もそれについていくエネルギーを集中してしまい、内容や質の充実がかけていると感じています。
- ・ 年々増える低年齢での保育園入所は、待機児童を出さないように、そして保育園を利用する家庭の負担を減らすために対応する中で保育現場にしわ寄せがいき、保育の質の低下につながっていると考えます。
- ・ 両親ともに仕事をするのが当たり前となりつつある中で、子どもを預ける環境は整っていても、家庭で過ごすより保育園で過ごす時間が長くなる子どもたちにとって、保育園の環境がどれだけ大切か家庭と保育者と行政は同じ土台で考えなければいけません。市立の保育園が大半を占める北杜市では、保育者は行政の管轄であるため、家庭>行政>保育者となりがちで、子どもではなく家庭へのサービス面を重視した支援になっていると思います。
- ・ 実際に居住する地域に関係なく、市内の私立保育園への入園希望者は多く、その保護者らより話を聞くと、『様々な経験ができて子どもにとって良い環境だと思うから』『市立保育園より子どもや家庭の状況に合わせて柔軟な利用の仕方や対応をしてくれる』『家庭より保育園で過ごす時間が多いので、保育環境が良いところ』『北杜市ならではの自然環境に特化した保育でのびのびと育ててもらいたい』などの声が聞かれます。
- ・ 「右にならえ」の環境ではなく、自然豊かな北杜市だからこそ実現できる子どもがのびのびと、他では経験できない良い保育の環境について、現場の保育者や北杜の特性を活かして事業をおこなう団体や企業、そして行政と家庭とともに考え、力を合わせて実現するべきだと考えます。市立保育園は足並みをそろえないといけないというジンクスにとらわれずに、各地域の特色を持った保育園で保育者がいきいきとやりがいを持って働けることやそこで育った子どもたちはかけがえのない経験という生きる力を持って世に飛び出します。そしてその時は感じなくても大きくなった時に育った地域への愛着を感じると思います。それがふるさとを守る一歩につながるかもしれません。
- ・ 特色ある保育環境を目指すための具体的な取組は以下のとおりです。新しい園を設立するのではなく、今あるものをどう活かして変化させていくかが要だと思えます。

【具体的な取組案】

・ 運営自体を企業に任せる、又は共同運営する

例えば、市内企業がおこなう水育を大いにとりいれた保育理念を掲げ、親子で植林活動を通年でおこなったり、毎日自然の中で過ごす時間があったり、子どもだけでなく親子で環境について学ぶ時間など、行事としてではなく、保育園での生活の中に当たり前におこなわれることが望ましい。

長けた分野に関する企業努力は、凄まじいものであるため、そういった北杜を活用した企業ならではの視点で運営することにより、特化した環境ができ、魅力を感じる人が多いと考えます。

- ・ **幼児教育を取り入れる又は、幼稚園の設置**

市でおこなう認定こども園のような条件なく入所できる時短保育ではなく、モンテッソーリ教育やシュタイナー教育、七田式教育、体育に特化した教育など、こだわりをもった教育方針を掲げた教育プログラムを取り入れる。乳幼児の大切な成長時期に、良い影響をもたらす教育は、子どもの将来への投資であり、まちにとっても幼少期から次の担い手の育成に取り組んでいるのと同じである。

- ・ **スポーツアスリートが監修する体育会系の園（高地を活かして体力向上）**

自主保育をおこなう団体などに補助金 など

< 地域子育て支援拠点（つどいの広場、地域子育て支援センター、児童館）の更なる有効活用 >

- ・ 保育園に行かずに家庭で保育している人や保育園や学校に通っていても、人とのつながりを感じられる場所作りが大切です。子どもと向き合いながら毎日過ごす親にとっては、とてつもなく大きな存在です。
- ・ 預かってもらう、なにかしてもらおうという一方的な支援ではなく、親子同士、地域の人との関わりがあり、互いに支え合って子育てをおこなうことで虐待やネグレクト、育児ノイローゼの予防にもつながる唯一の場所です。
- ・ 親子同士・地域の人とのつながりを感じられる場所づくりとして、市内にある地域子育て支援を行う「つどいの広場（4カ所）」、「地域子育て支援センター（3カ所）」「児童館（4カ所）」への提言は以下のとおりです。

■つどいの広場の活用 ～親子と社会、地域のつながりの場へ

- ・ つどいの広場は、0～3歳の子とその保護者を対象とした施設で主に保育園入園前の親子の居場所として活用されています。
- ・ つどいの広場は、保育園内にある支援センターと違って、単独で設置されているところもあつたり、利用親子以外の地域の人が行き交う場所に併設されていることもあります。子育て支援センターよりも柔軟に地域との連携がとりやすい事業なので、親子と社会、地域とつながる役目があります。
- ・ 少子高齢化率が高いこの広い北杜市という地域の拠点という場所で『いつでもおいでよ』と待っているのではなく、地域に向いて親子と触れ合う、又は、親子をつれて地域に向くという行き来が今後大切になってくると考えます。

【活用例】

- ・ 日頃からボランティアの受け入れをおこなう（学生や地域の方など）
- ・ 地域の公園や施設などに遊びに行く
- ・ 常時開設の施設を維持するのではなく、1つを子育て支援の多機能施設にし、そこにつながるよう出張ひろば事業などを活用して出向くことで、相互の事業周知や利用のしやすさが生まれる。

■ 保育園と連携した子育て支援センターの活用

- ・ 子育て支援センターは、0～未就学児の子とその保護者が対象となっておりますが、現在の施設状況的に0～3歳が基本対象になっていて活発な4～6歳までの児童を遊ばせるには窮屈であり、機能していないと考えます。保育園内にあることを活かした運営をすることでそれを求める親子が集まってくるのではと考えます。

【活用例】

- ・ 定期的な保育園入園を控える親子のプレ保育の開催
保育園生活を身近に感じながら入園に向けた1日の生活リズムをつかむことで、親子ともに入園時の環境変化の負担を減らしスムーズなスタートがきれるのではないかと考えます。

■ 児童館の有効活用 ～乳幼児、保育園や小、中、高校生の交流の場に

- ・ 児童館に関しては、本来ならば0歳から18歳までの児童、保護者が利用できる幅の広い唯一の施設ですが、現状は主に学童保育利用者や放課後の子どもの居場所のみの活用となって機能が不十分だと考えます。
- ・ 少子化は進み続ける中で、家庭で過ごす子どもも減り、地域においても他年齢で交流できる機会が減っています。しかし、子どもは他の子どもや年上の子を見て刺激を受けたり、自分より下の子の面倒をみるなどの経験をして成長していきます。周りに子どもがいない、交流が少ない環境で育った親が現在子育てに苦労しています。乳幼児、保育園や小、中、高の境目なく交流できる児童館の特性を活かされていません。幅広い層が利用できる利点を大いに生かした運営が必要と感じます。
- ・ 児童館だからこそできることがあり、それが子ども同士の育ち合いであったり、子どもの息抜き場の確保であったりすると思います。

【活用例】

- ・ 中高生が集いやすい雰囲気作り、中高生を主体にした取組
- ・ 足がない子どもたちでも通えるような公共交通の仕組み又は、住民支え合いの仕組み作り
- ・ 他年齢で勉強を教えあう、子ども塾のようなもの
- ・ 子ども食堂のような機能
- ・ 子どもが安心して遊べる場所、子ども自身が選択して過ごせる場所として、市内各地域に設置する
- ・ ボランティアを積極的に受け入れ、多世代の交流をおこなう など

■ 時代にあった子育て支援施設の運営や支援のあり方の検討、民間の力の活用

- ・ 現在、「つどいの広場」、「地域子育て支援センター」「児童館」この3つの事業を行う施設の利用者は、生後12ヶ月で母親の育児休暇から復帰し保育園に預ける人が多く、2、3歳の子の利用率が年々減り続けています。
- ・ その中でも、1年後の入園に向けて過ごす親子ばかりではなく、生後すぐの頃は2、3歳まで一緒に過ごしたいと考える方もいるが、実際1年後、周りは入園する子が多くなり子育ての仲間がいなくなることや大きくなるにつれて子どものお友達も周りからいなくなり、子ども同士で遊ぶ機会もなくなって、孤育てを感じる方が保育園にあずけたいがために仕事を探して入園を決意するという話も少なくありません。

- ・ 必ずしも家庭で過ごすことが良い選択肢だとは思いませんが、親自身がそうしたい、一緒に過ごせるのなら…とっていたのに、ともに子育てする仲間作りができないままそれを諦めてしまうのは本末転倒だと感じます。両親ともに仕事をおこなう家庭が増える中で、子どもとの時間は希薄化する一方です。そこを埋めることができるのは、子育て支援施設であり、その役割は運営の仕方によって変わると考えます。数がいくらあっても『いつでもおいでよ』とただ開けておけばいい。と、本来の事業目的が機能していなければ意味がありません。子育て支援施設であり、その役割は運営の仕方によって変わると考えます。
- ・ 運営の細部までしっかりと目を向けて、今の時代にあった施設や支援のあり方を模索して実施していくためには、委託で民間の力を最大限に活用してもらい、行政側は、それを全面的にバックアップしたり、ともに考えあって協働運営していくことが良いのではないのでしょうか。
- ・ これからは、地域を歩き来して、保育園、学校などに入っている人も通いやすい、過ごしやすい、年齢層や地域で区切らず子ども同士、親同士が育ち合えるそんな場所が必要です。
- ・ そして、子育て世代のみが集うのではなく、高齢者や地域の方も集いやすい場、多世代が過ごす拠点運営を目指すべきと考えます。民間、行政、市民それぞれの特徴、良さを活かすことで時代の変化に遅れをとることなく、質も内容もニーズに応じて対応できるのではと思います。

<子どもがのびのび遊び・学べる場所づくり>

■雨の日、冬などの室内で子どもがのびのびと遊べる場所づくり

- ・ 雨の日、冬の大風の日、幼児はどこで遊べばいいのか 移住でほとんど知り合いもおらず、高齢出産のため子育て支援センターに来るお母さんたちとは世代が違いすぎて仲良くなれず、ただでさえ行くところがないのに、雨の日や冬の大風の日には本当に困りました。
- ・ 団地で階下の住人から子どもの足音がうるさいと12ヵ月頃からトラブルだったので家にもいられない。ショッピングセンターは音が大きすぎるし、子どもがいるべき場所ではなかった。気が狂いそうでした。子育て支援センターのような場所が休日や夜間も空いていたら。

■子どもが外遊びしやすい場所づくり～母親が連れていきやすい公園やプレーパークの設置

- ・ 誰でも楽しめる公園やプレーパークがほしい。自然には囲まれているんだけど、母だけでは気軽に外に行けないという人もおり、連れていきやすい楽しい公園があるといいと思います。
- ・ 北杜市は外で遊んでいる子が少なすぎる。都会では放課後や休日の公園はいっぱい、外遊びも部屋遊びもどちらもできる子が多い印象です。健全な心身は外遊びの充実から。
- ・ なぜ子どもが外に出ないのか、今ある公園では何がダメなのか。リサーチしてみるといいのではないかと思います。

■子ども・親・教師への環境学習（体験学習）ができる施設の提供

- ・ 市内・外の子どもたちが、豊かな自然の中で地球温暖化などの問題について考え、また自身の未来を想像できる場所として、そして同時に豊かな自然を生かした観光資源が親子で楽しめるフィールドとして、小・中学生（教師・保護者等同伴含む）に対して環境学習（体験学習）が常時（課外・休日等）行うことが出来る施設を提供くださることを望みます。

- ・ このことにより、将来子どもたちが帰郷したくなる想いを高めるとともに、親子で楽しめる観光地としての需要も高めることにつながると考えます。

< その他 >

■少子化対策はトータルの支援が必要

- ・ 少子化対策として、子育て支援住宅はあるが遊び場や教育環境、生活環境などトータルで子育てがしやすい支援が必要だと思う。
- ・ 自然豊かで遊休地も豊富、オンラインも普及している中、支援策はまだまだ考えられると思う。

■生活環境の魅力向上による移住促進の検討が必要 ～自然以外での強みをつくる

- ・ 生活環境では魅力ある店舗をつくる。大型のモールなどの誘致など、自然以外で人を集められるものを企画する。
- ・ 地元の風習なども、良さはあるが排他的要因となりうる為、外からのモノを受け入れて行く発信を公主導で行なって行く。田舎の良さではなく田舎を使った特色をどう出していけるか、発想をいかに柔軟に持てるかが大切だと思う。

■スマホ育児の危険性などの周知

- ・ スマホ育児について 赤ちゃんをスマホで子守りする危険性を親子教室などで警告していくべきです
- ・ ある程度の年齢になるまでその世界に頼るのは親にも子にも大変な人間力の欠落を招きます。
- ・ 子どもたちは外の世界に期待して生き生き力を発揮したくて生まれていると思うので、携帯に頼って人の進化する力を止めてしまうなんて本当にもったいないと思います！
- ・ 地域の子供達も手先も不器用になってきていて、自分で考える力や楽しみを作っていく事がどんどんできなくなっていく印象です。明らかな経験不足だと感じています。

■給食の食材や使用する洗剤等への不安

- ・ 添加物入りの食材や、抗生剤を使用したお肉や牛乳、ゲノム編集された食べ物、遺伝子組み換え食品（しょう油、植物油）、農薬漬けの野菜、放射能汚染された食材などが使用されていないか、不安を感じる。
- ・ 学校や園で使用する洗剤や、5Gの電磁波、消毒剤による常在菌の喪失などに不安を感じる。

② 健康・福祉

■日常生活での一人一人の健康維持・管理の更なる普及

- ・ 健康寿命を延ばすための食生活改善として、今後は各家庭で簡単に健康状態や塩分濃度などチェックする道具を家庭に普及させ、日々の食生活や運動などの状態を自分自身で考え、行動し介護が必要な状態にならないよう、取組みを進めていきたい。

③ 市民生活・文化

■ 囲基人口の増加

■ スポーツ少年団等の強化 ～指導者の育成、資格移行・更新等に関わる支援

- ・ スポーツを通して心と体を育てると共に、さまざまな活動を取り入れる中から協調性や創造性を養い、社会ルールや思いやりの心を学ぶ場として、必要な場と捉えます。その子どもたちを育て、指導する人材育成に行政のお力を借りたいと思います。
- ・ 具体的には、アクティブチャイルドプログラム等を習得した指導者の育成、また、ボランティアで行っているスポーツ少年団指導者の資格移行・更新等に関わる手数料等の支援をお願いしたいと思いません。

■ 外国人就労者の支援 ～教育支援、移動手手段、住まいの確保

- ・ 外国人就労者も増加してくる中で、対応言語がまだ限られている。せめて日本に来て働きたい方がいる国の言語にはすべて対応して欲しい。また北杜市においての外国人就労者の課題は、日本語の教育支援体制、移動手手段、住居確保の困難さにあります。
- ・ 退職後の教育者の登用、原付免許取得支援や国と協力して社宅支援など考えて欲しい。

④ 産業経済・観光

■ 食品製造業の誘致、工場見学施設を活かした観光などの取組への支援

- ・ 食品製造業は冷凍化を進めることで国内各地だけでなく輸出が可能になります。水が豊かで綺麗である。その特長を活かす商品が全世界に発送出来るようになります。食品製造業の誘致や工場見学施設を活かした観光などの取り組みにご支援をよろしくお願いします。

■ 若い世代を呼び込める働き場の確保

- ・ まずは、働き手の確保が最優先課題である。その為に生活する為の環境や、住み続けていける条件を整理する必要がある。若者が都市部に流出してしまう要因として魅力ある職場がない事、便利に生活できる環境がない事、昔の風習などに囚われている事があげられる。
- ・ 自然の豊かさにあぐらをかいては人は、定着して行かない。まずは働く場の確保（自然をアピールするのでは無く、それを利用して新たな事業者を誘致するなどおこなう。たとえばアニメやサブカルチャーと自然をマッチングさせるなど）を違う角度から検討していく。

⑤ 環境・都市基盤

■ 災害時における子ども（特に乳幼児）女性等が安心できる備えや支援体制づくり

- ・ 一般の避難所での子ども連れ優先スペースの整備、授乳・オムツ換え・乳幼児が夜泣きした場合の退避スペースの確保、乳幼児向け食料・物資の備蓄。
- ・ 女性や子どもを狙った避難所犯罪防止のための警備体制の整備。
- ・ 災害後、大人が動いている時の安心安全な子どもの居場所作り。

■ 地域での防災力の強化 ～過去の被災状況の共有、災害リーダーの育成

- ・ 先住者(地元の高齢者)に地域の災害の歴史を聞いて、新規移住者も含めて情報共有し、多種多様な人が揃っての災害リーダーを育て地域活性を進め、ひいては災害に強いまちづくりに繋がるのではないかと考える。隔たりがどうしても解消できない地域であっても、行政が加わることでより円滑に交流が生まれやすくなるのではないかと。

■持続可能な地域づくりの実践 ～市役所における SDGs の推進体制の構築、市民の意識醸成

- ・ 持続可能な豊かな北杜市の将来を築くには、SDGs の 17 の指標に基づいた開発目標を策定し、SDGs の 3 側面である経済・環境・社会が総合的に向上しバランスよく達成することが必須とされています。
- ・
- ・ よって、地方自治体には、これらを円滑に推進すべく各部・各課ごとに SDGs 担当者を選任し、しっかりとその目標に対しての執行管理できる体制を望みます。また、その執行管理の進捗状況を検証する専門家による第三者委員会の設置も併せて望みます。なお、このような自治体の取り組みを市民に可視化することで SDGs に対する市民一人一人の意識の醸成が生まれ、多様な関係者等を巻き込んだ官民一体となった持続可能な地域づくりの開発目標を策定することが可能となると考えています。これにより、市民も関与した目標を官民一体で達成することが可能となり、持続可能な北杜市の未来に向けての取り組みが具現化すると考えております。

(2) 5つの「2030年、地域のありたい姿」の実現に向けたご意見等

新たな北杜市総合計画で掲げる5つの「2030年、地域のありたい姿」の実現に向け、北杜市（行政）と業界等との連携のアイデアや必要な取組について聞いた結果である。

＜5つの「2030年、地域のありたい姿」＞

- ・ 子どもの笑顔が自分の笑顔になるまち
- ・ とともに、よりよく生きるまち
- ・ もっと、世界を魅了するまち
- ・ 新たな価値を奏でる創造のまち
- ・ 安心をずっと、サステナブルなまち

「子どもの笑顔が自分の笑顔になるまち」に向けて

■まちの中心にある様々な世代が利用できる公園を

- ・ 子どもだけの公園ではなく、まちの中心にあり、近くに病院や障がい者施設や商業施設があることで人が交わり、子どもの笑顔を多くの人が見える公園に。コンビニ弁当を食べるおじさんやお兄さん、病院通いの人、買い物の人、散歩やランニングの人、いろんな人が子どもの笑顔を見ることができる、そんな公園に。
- ・ 今は世代間の隔たりが大きく、高年者が保育園を迷惑施設と考え、自分たちさえ良ければと思う時代。40歳近くで母となったが、子どもとの関わりがそれまでほとんどなかったため、子どもがどういふものが忘れてしまっていた。いきなり赤ちゃんですよと言われても困った。子どもと大人の断絶が子育てをより難しくしている。
- ・ 例えば、佐久平駅の周辺施設には公園がいくつもあり、子育て世代は遊具のあるところで、若者世代は生涯学習施設やスケートボード場や公園で語り合うなど、一般成人は駅利用者やショッピングセンターを利用するなど、いろんな世代が行きかう場所となっている。

■子育て世代(ママ)に向けた身近に受けられる講座や研修などの個人事業開業支援

- ・ 個人事業開業支援を子育て世代(ママ)向けに展開 ライフワークバランスを考え、手仕事をする方も多いが、個人事業主というハードルが高く感じその後の継続されないこともあるため、子育て世代が身近に受けられる講座や研修をタイアップしておこなう。

【民間団体等にできること】研修、講座等の周知や受け入れ

【行政にできること】研修、講座のプログラム及び人材派遣 又は、専門者とのマッチング

■市民活動(子育てサークル、自主保育など)支援、センターの設置

- ・ 市民活動が活発化することにより、行政では手の届きづらいことも 住民同士だからこそできることがある。まちの活性化にもつながる。

【民間団体等にできること】活動をおこなう人同士のマッチングや支援情報などの提供、周知

【行政にできること】事業費の補助や場所の提供、情報共有、周知、連携

■民間による孤育て*家庭への見守りや、みんなで親・子をサポートする仕組みづくり

- ・ 民間力による、脱孤育ての仕組み。地域が広く、少子化に伴い隣近所に子育て仲間がいないと不安になったり、身近に親類がいなかった核家族化している孤育て家庭をボランティアが訪問し、一緒に家事や子供のお世話をする仕組み。
- ・ ホームスタート事業や妊娠期から、市の母子保健事業の相談や支援先だけでなく、地域で活動する団体や人やとつながるきっかけのイベント開催など、行政でおこなう支援にプラスアルファで民間支援を取り入れて、挫折しやすい妊娠期～乳幼児期の家庭をみんなでサポートする仕組み。

【民間団体等にできること】事業実施

【行政にできること】事業費の補助、情報共有、周知、連携、これら4点を含んだ場所の設置

行政は行政が得意とする分野で力を発揮し、民間は民間の良さをもって、地域とつながりながら、市民が気軽に集いやすい拠点を1つ構築して、そこから各地域へ発信、赴き地域づくりをおこなう。

※孤育て：子育てのもじりであり、夫や親族の協力も得られず、近所との付き合いもなく孤立した中で母親が子供を育てている状態をいう。

■子どもへの囲碁の普及

■自然に頼らない、移住の促進

- ・ 移住者も自然を求めて来る人を集めるのではなく、取り組みを求めて来る様にする必要がある。その為にも今までしがみついている自然と言うワードを捨てる必要があると思う。
- ・ 民間の活用無くして発展は無い。高齢化する中でいかに特色を出して行けるかだと思う。
- ・ バイオマスや再生可能エネルギーが坂の多い北杜市でいかに受け止められるのか？車を使うしか無い山間地で綺麗事だけでは人は集まらない。

■少子化を受け入れることも先決

- ・ 高齢化、少子化は全国的な問題です。こどもを増やすことも大事ですが、この状況を受け入れて対応する方法を考えることが先決だと思います。

「ともに、よりよく生きるまち」に向けて

■市立病院を統合し、新たにオンライン診療など活用し在宅医療の充実を目指すべき。

■観光施設における心のバリアフリー認定制度に取り組むこと

【以下、観光庁ホームページより「観光施設における心のバリアフリー認定制度」】

- ・ バリアフリー対応や情報発信に積極的に取り組む姿勢のある観光施設を対象とした「観光施設における心のバリアフリー認定制度」を創設。認定を受けた観光施設は、観光庁が定める認定マークを使用することができます。これにより、観光施設のさらなるバリアフリー対応とその情報発信を支援し、ご高齢の方や障害のある方がより安全で快適な旅行をするための環境整備を推進します

■「知ってる人」「助けて！と言える人」を地域にたくさん増やす取組み

- ・ 3世代が集まれるシンボリックな公園、箱物、居場所作り。災害時には避難所として広く開放出来る。

■生涯スポーツの強化

- ・ 生涯スポーツを通して、健康で自立した生活を送り健康寿命を延ばすため、どこでも・誰でも手軽にできるスポーツの普及を目指し、スポーツのできる環境づくり、また、それらを指導できる人材の育成等を行政と連携して行っていききたいと思います。

■世代を超えたつながりで支え合う仕組みづくり

- ・ 高齢者、子育て世代、シニア層がそれぞれに食料や学習支援等を行い支え合う。

【民間団体等できること】ボランティアを集めて現場を運営する

【行政にできること】補助金や場所の提供、周知、情報の共有、子ども・地域食堂、フードパントリーなど

■複合的福祉施設の設置 0～100歳までが集える1つの村のような施設を設置する。

- ・ 例としては、児童館(つどいの広場)、公民館機能(貸し施設)、高齢者通いの場等が併設している複合的福祉施設をつくり、0～100歳までが集う場を設置する。
- ・ 少子高齢化だからこそ多世代が集う場所が大切。イベント的な交流ではなく、生活の一部、習慣になるくらい当たり前になる場所。
- ・ 子どもは高齢者の活力の源となり、子育て世代も身近な高齢者を知ることにより、相互の見守りや支え合いが実現する。

【民間団体等にできること】事業内容によりマッチするものは運営又はサポート、連携

【行政にできること】補助金や場所の提供、情報共有、周知、連携

「もっと、世界を魅了するまち」に向けて

■「持続可能な観光」の実践

- ・ 滞在プログラムや滞在施設等で、しっかりとSDGsの取組を行い、その取組がわかりやすく伝えていくこと。以下の資料を参照に取り組むとよい。

<参考資料>

観光庁・UNWTO 駐日事務所「日本版持続可能なガイドライン」(2020年)

<https://www.mlit.go.jp/kankocho/content/001350849.pdf>

■環境に配慮した観光振興

- ・ 脱炭素化に向けて、電動バイク・電動スクーターなどの導入を進め、成果を見えるようにし、住民や来訪者と一緒になって取り組んでいく。
- ・ 世界に誇る、水・山岳景観・星の資源を官民一緒になって磨き上げることが必要。(まずは市民の意識啓発と意識の醸成)

■効果的な情報発信

- ・ポータルサイトへ情報を集約し、国内外に向けた情報発信が必要。

「新たな価値を奏でる創造のまち」に向けて

■北杜市の豊かな自然を活かし、官民協力して世界に先駆けた専門大学等の創設の推進

- ・これまでとは、定住の考え方が変わってきています。生活環境により個人にあった定住地を求めています。そこには、職業の多様化及び世界のグローバル化が進むと考えます。北杜市の持っている環境を活かして子供から老人まで幸せを感じる街を目指して、水の山を活かし世界に先駆けて、専門大学等の創設を官民協力して推進するべきだと思います。

■「第2のふるさとづくり」に取り組むこと

【以下、観光庁ホームページより「第2のふるさとづくり」】

- ・コロナ禍等によって働き方・住まい方に関する意識が変化する中で、密を避け、自然環境に触れる旅へのニーズの高まりや、ふるさとを持たない大都市の若者が増え、田舎にあこがれを持って関わりを求める動きがあります。
- ・こうした新しい動きも踏まえ、いわば「第2のふるさと」として、「何度も地域に通う旅、帰る旅」というスタイルを推進・定着させることで、国内観光の新しい需要を掘り起こし、地域経済の活性化につなげることが重要です。

■高速道路の早期着工と公共交通機関の整備

- ・空白をチャンスに変える為にも地元民という概念を取り払って行くような政策が必要です。そのために高速道路の早期着工と公共交通機関の整備を望みます。

「安心をずっと、サステナブルなまち」に向けて

■レジリエントな都市づくり

- ・災害時に備えて、レジリエントな社会構築を急速に押し進め、若い世帯が安心して住みたくなるような都市づくりを目指す。

■災害時の子育て世代の避難環境づくり及び支援

- ・災害時の子育て世代の避難環境及び支援を整えることで、子育て家庭に移住先として相応しい地域であることをアピールすることが可能となる。
- ・乳幼児を持つ家庭への防災啓発イベントを通して乳幼児を持つ家庭が公的機関に求める声を届けるとともに、自助意識の向上に取り組んでいる。こうした市民から市民へ伝える活動は、住人同士の横の繋がりが生まれやすくなり、災害に強いまちづくりの上に家庭ごとの備災があれば、結果公助に時間が掛かっても多くのいのちを繋げることになるのではないかと考える。

■再生可能エネルギーの導入

- ・ 再生可能エネルギーの最先端技術を積極的に導入し、生活に必須の食料・水・エネルギー等の地産地消が可能な地域づくりを進める

■市内の自然環境の保全活動の普及・推進

■湧水や地下水の活用

- ・ ダムから湧水や地下水へ 水がウリの北杜市のはずですが、水道水が美味しくないのはうちだけでしょうか。ダムから湧水や地下水へ切り替えていくことは無理でしょうか。水源地に太陽光パネルなどの人工物を許さず、保護するようにお願いします。

■再生可能エネルギーの安定供給に向けた普及啓発・調査等

- ・ 市内の水量豊富で急峻な河川を利用した小水力発電設備の設置可能性調査を広範囲に行い、また水利権者の理解を得やすくするための普及・啓発事業を推進することで安定供給できる再生電力を確保する。

■有識者などによる環境改善活動に関するワークショップなどの開催によるモデル地域へ

- ・ 豪雨災害を防ぐために、水源の森再生プロジェクトなど環境改善活動などに取組む賢人の知恵を借りるため、北杜市が依頼してワークショップを開いてもらう。環境も良くなり、全国から人も集まり、全国的にも画期的なモデル地域となるのではないのでしょうか。

■若い世代を取り込んでの森林の保全や里山の活用

- ・ 豊かな水と共に生きるまちとして、森林の保全、里山の活用に若い世代の活躍を願う。

(3) その他、ご意見やご提案等

■市が限界を迎えないための対策 ～若者が集まるまちづくりが必要

- ・ 市が限界を迎えないための対策が必要だと感じています。人の減少に歯止めがきかなくなる前に大きな方針が必要だと思い書かせていただきました。若者が集まる街づくりを考えていかなければなりません。

■自治活動の役員の見直し

- ・ 地域の役員や活動は 70 代 80 代がメイン。10 年後の見通しは現状でも、共有地の草刈りができず、道や宅地に農薬散布し、子どもが花飾りも作れないし虫取りもできないところがあります。過疎化が進み、高齢者の 1 人がいくつもの役を引き受けてなんとか成り立っているところもあります。役を減らす、なくす、中年世代が働きながらでも可能な内容にするなど工夫が必要かと思えます。

■市民活動団体の連携・交流を促進する拠点施設の設置

- ・ 北杜市は移住者も多く、また地域が広範囲なため、全体での動きが非常に難しいところではありますが、それぞれの地域で活動している市民団体とうまく連携を取れていけたら良いと思います。
- ・ その為に、『市民活動センター』的な、さまざまな分野の市民活動団体やボランティアなどで活動している人、これから活動しようとしている人たちが活発に行き交い、利用団体同士の連携や交流が促進される協働の拠点施設となることを応援する施設があると良いと思います。

■本件のような事案について話し合えるような機会の創出

■移住の促進

- ・ 日本の人口が減っていくのは避けられない事実です。首都圏など人口集中地域から移住することを国が推進すれば、地方が活性化すると思います。